

ネオンを消して

「電気を消してスローな夜を」

2年前から夏至の日と冬至の日の夜に一斉に灯りを消そうというイベントが、全国で繰り返されています。『百万人のキャンドルナイト』と名付けられたこのキャンペーンと呼びかけ文には「プラグを抜くことは新たな世界の窓を開くことです。それは人間の自由と多様性を思い起こすことであり、文明のもっと大きな可能性を発見するプロセスであると私たちは考えます」と記されています。

そのような中、大阪に本社がある松下電器産業は、国内のグループ全220事業所で、広告用ネオンサインを今年の7月21日から9月末まで消灯することを決めたようです。「バナソニック」「ナショナル」と表示したネオンサインを毎晩午後8時に一斉消灯し、夜通し消したままにすることで、地球温暖化対策に前向きな姿勢を示し、企業イメージの向上につなげるといいます。試算では、この期

間で二酸化炭素の排出量を約80トン減らせ、電気代も約2000万円節約できるそうです。ネオンサインを消すことで企業の宣伝になるというのはとても逆説的ですが、これからの社会の価値観として根付いてほしい気がします。

公害と光害

高度経済成長期には、経済が優先されるあまり、生物の内外の環境が二の次にされてきました。その結果、多くの人の健康を害したのが公害で、アスベストの問題もわかりです。必要以上のエネルギーの消費によって、地球温暖化などを招いているの

も全く同じ構図です。小学生のころ、東大阪市に住んでいましたが、当時は排気ガスの規制も弱く、空はいつも汚れていました。雨の日はもちろん無理ですが、晴れた日も光化学スモッグ注意報が発令されグラウンドに出て遊ぶことは禁止されました。

夜空も同様です。雨や曇りの日に見られないのは当然ですが、晴れた日でも大阪の空にはほんの数個の星しか見えません。

星が見えないのはスモッグのせいだけではなく、「光害」と呼ばれる人工的な光が都会にはあふれていることが大きな原因です。それが淡い星々の光を見えなくしてしまっているのです。

街の灯と流れ星

〜浪費のために見失ったもの〜

流れ星の正体は、意外にも、大きさが砂粒程度しかない宇宙のゴミです。それが秒速数10kmの猛スピードで地球に衝突し、地上80〜120kmくらいのところで大気との摩擦で燃え尽きます。そのときの光を見て「あつ、流れ星！」と叫んでしまっているわけです。

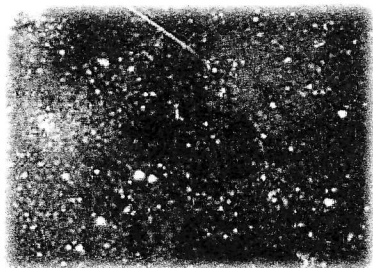
流れ星がたくさん出現する日、言い換えれば、宇宙のゴミが地球にたくさん降ってくる日は、毎年決まっています。それらを流星群と呼んでいます。日本を含む北半球では、8月12日ごろのペルセウス座流星群、12月13日ごろの双子座流星群、1月4日ごろのりゅう座流星群が、3大流星群と呼ばれ、とくに夏のペルセウス群は有名です。

ゴミたちは、宇宙空間の同じ方向から地球にぶつかってきます。たとえば8月12日ごろの流星群は、夜空を見上げたときのペルセウス座のほうからぶつかってくるようになります。その結果、ちょうど雨や雪が降って

くるのを下から見上げると四方八方に広がって見えるのと同じように、その日の流れ星はペルセウス座から四方八方に飛び散るように流れるので「ペルセウス座流星群」と呼ばれているのです。

8月初旬からお盆のころまで、とくに12〜13日ごろは本当にたくさん流れ星が出現します。ペルセウス座が北東の地平線に姿を現わす夜の10時ごろから夜明けまで全天を観測してみてください。今年には月明かりもない好条件なので、平均して1分間に1個程度、一晩見上げれば何十個、何百個と観測できるでしょう。流星観測には望遠鏡も双眼鏡も必要ありません。海であれば、寝転がって空全体を肉眼で眺めるだけで、そこが宇宙の浜辺であることができます。と実感できるでしょう。

流れ星は、とても願ひ事を唱える間もない一瞬の輝きですが、その前後には、改めて自らの存在を原点にした哲学にふける時間を、ゆっくりとゆったりと与えてくれるのです。



勝村久司 文
text: Hisashi Katsunuma

PROFILE◎かつむらひさし
1961年生まれ。京都教育大学天文学教室卒。大阪府立高校教員。90年に長女を医療事故で亡くし薬害や情報公開の市民運動に関わる。著書に『はくの「星の王子さま」へ』（幻冬舎文庫）等。
<http://homepage1.nifty.com/hkr>